

# 哲學研究

第四百六十六號

第四十卷  
第八冊

何故ハムレットは復讐をためらうのか

リヒアルト・クローナー  
阿部正雄訳

一

「何故ハムレットは復讐をためらうのか」という問いは、これまでシェイクスピア學者、批評家、文學史者、哲學者、及び詩人により繰返し問われてきた。既に多くの答えが與えられ、その何れもが何らかのとりえをもつてはいるが、どれ一つとして十分に満足な答えであるとは思われない。私はまず最も重要な諸説を論じ、次いでこの極めて入り組んで複雑な問題を解決せんための、私自身の試みを提起しよう。解説者のある者は、ハムレットが、シェイクスピアの劇中の一人物であることを忘れ、彼の、人を惑わしめる行動を説明せんとすることを、さながらある現實の人物、即ちある歴史的に實在せるプリンスを理解せんとする問題であるかの如くに考えている。このハムレット問題の論議を通じて、常に我々が心に銘記しておかねばならぬことは、眞の問題は、このような歴史的に實在する人物にか

かわるのではなく、むしろ作者シェイクスピアの意圖は何であつたか、にあるということである。それ故に本當の問題はこうなのだ。「何故シェイクスピアは、彼の悲劇の主人公をしてためらわせるのか」 たゞこの問いのみが、まともに且つ學問的に考察しうるのである。

幕が開く前に、既にある恐るべきいくつかの事件が起つてゐる。デンマークの先王、ハムレットは彼の弟クロード・アスにより殺害されてしまつてゐる。この暗殺の直後、クロード・アスはハムレットの母ガートルードと結婚し、あまつさえ王位を篡奪してゐた。さてハムレットの父王の亡靈はその息子にこれらの出来事につき告げ知らせ、「あなたに情愛あるならば、この怨みを忍ぶなよ」(I, v, 83)と云つて、復讐をなすよう彼を驅り立てる。ハムレットはこの言いつけに深く意を用いないで、その實行を一日一日、一週間一週間と延してゐる。彼は自分のおかれた窮境をあれこれと慮り、且つ自らの運命につき思索をめぐらす。ハムレットは決心することが出来ない。彼はこの優柔不斷の故にひどく自らを責める。彼は自分をずるいやつ (II, ii, 594) やくち者 (ibid. 576) 卑怯者 (ibid. 598) 悪人 (ibid. 596) 等とよぶ。シェイクスピアが我々讀者を驚かせ、何故ハムレットは父王の差し迫つた頼みに直ちに従わないのか、何故彼はそれに従うべきか否かに狐疑逡巡するのか、何故彼はすゝんで、罪を犯せる叔父を罰し父の王位を繼ぐべき自らの正當の權利を回復しようとしなのか、等の點を我々が訝るようになしよと望んでゐることは明らかである。何故シェイクスピアは、他の場合は高貴で勇敢なプリンスである彼の主人公をば、このような異様な状態にあるものとして描くのであろうか。

我々はこの劇を観る者の心の中に、ハムレットの性格についてある驚きをひき起すことが、明かにシェイクスピアの目的であることを、まず明白にしなければならぬ。もしハムレットがあのように激しく、且つ残酷なまでに自らを責めさいなまなかつたら、彼が暫したじろぎ、亡靈の意志を直ちに實行しないということに、我々は別に驚きはないであらう。たしかに新たな王を處罰することは容易なことではないであらう。クロード・アスは既に彼の地位を

安全にするための様々な處置をとつていた。彼は自らの王位篡奪に少くとも適法であるとの外観を與えるために、公開の選挙を用意していた。彼はさきの王妃と結婚し、かくて自らの権力にある光輝を加えていた。又彼はハムレットを自らの王位繼承者として指名することを最後には約束していた。その上彼の犯した罪は包み隠されていたのである。彼は今や國をしっかりと手中に収めている。それ故に彼をその地位より追ひ落さんとする如何なる企てにも、大きな危険がはらまれている。このような大膽極まる行爲の結果は、決して保證されてはいなかつた。ハムレットがこのような危険を犯すことをためらうのは自然ではなからうか。クローディアスを即座に暗殺することは、何れにせよ、明かに無謀な企てであつたであらう。こゝで附言しておかなければならぬことは、ハムレットは、果して亡靈が眞實を語つたか否かについて、絶對的な確信をいだいていないということである。彼は過激な手段をとる前に、何よりもまず事實を確かめなければならなかつた。しからば何故にシェイクスピアは、ハムレットをして、彼がことを決行するに先立ち、その置れた狀況を顧みる時、激しく自らを罵りさいなましめるのであらうか。

こゝでハムレットに開かれていと思われる、他の二つの可能性がある。彼はオポチュニストとして、あらゆるわずらわしい紛争を避け、「のんきに構え」、周囲の狀況をせい／＼利用することを、もししよと思えば出來たであらう。しかしハムレットは、かゝる態度をとることを拒んだ。シェイクスピアがしきりに示さんとしている如く、彼は決してオポチュニストではない。彼はかゝる道の可能なことを知つてはいるが、それは自らの性格にふさわしからぬものと見なしている。かの有名な獨白「生きるか、死ぬるか、そこが問題なのだ」(III, i, 56)において、彼はこの點に關し自らの心を十分明白に語つてゐる。

ハムレットの眼前に開かれてゐる第二の可能性は自殺である。彼はこの道を、さきの場合と同じ明敏さをもつて顧みるが、結局第一の可能性と共に拒むことになる。「あゝ、このあまりにも汚れた肉體が溶けて崩れて」(I, iii, 129)という獨白において、ハムレットは彼のいゝわゆる「自殺」self-slaughter に思案をめぐらすのである。しかし宗教的良

心にとがめられて、かゝる現實逃避的な決定をさし控える。彼自身はこのような過激な處置をとることにひどく誘われてはいたけれども。

## 二

しかしながら、もしハムレットが日和見主義も自殺も共に拒むならば、何故彼は復讐を執行せぬからとて、自らをそのようなきびしく、且つ不條理なまでに責めさいなむのか。

この點に關しては、これまでいくつかの説明が企てられて來た。外的諸事情はハムレットの心中にある不決斷を生ぜしめるに十分であると、ある學者達は信ずる。既に指摘した如く、これら外的諸事情がハムレットの態度の一因となつてゐることは反駁すべくもない。これらの事情がなければ、彼は執行の必要に迫られることもなかつたであらうし、又復讐の困難さを思い知らされることもなかつたであらう。しかしながら——なるほどこれら外的諸事情は重要ではあるが——、單にそれらだけではハムレットのはげしい自責を説明するには足りない。反對にこれらの諸事情は彼の遲疑逡巡を、少くともある程度まで正當づけもする。その上ハムレットは先きに二つの可能性として述べられた如き別の仕方——彼はそれを考へてはみたが、結局拒んだ——で、その苦境に處することも、しようと思えば出來たのである。シェイクスピアは、環境の中ではなく、ハムレット自身の中にある特異な障害に、我々の注意をむけさせようとする。この劇を成り立たせてゐるものは、主人公ハムレットの内面の苦境であつて、外面の出來事だけではない。

ギリシア悲劇は主として運命 *fate* に根ざしてゐたが、シェイクスピアの悲劇は個人の宿命 *destiny* をあきらかにする。ハムレットの自らを責めさいなむ内省の原因をなし、彼の思案熟考をひき起させるもの、そして最後には彼の悲劇的死にまで導くものは、外ならぬハムレットという個人的存在なのである。

他の學者達が、ハムレットの特異な性格を強調したのは、正にこの故であつた。彼らはハムレットの病的な精神状態、憂鬱な氣質、非理性的な氣まぐれな氣分の變化を指摘する。ある學者は全戯曲を、精神分析學の假定から眺めて解釋するということさえやつた。彼らは特にハムレットとその母との關係に言及し、彼の母に對するさまゞな痛罵を嫉妬から生じたものと解釋する。シェイクスピアの戯曲中にはこのような嫉妬の情が跡づけられないことを、彼らも認めなければならぬけれども、シェイクスピアの天才は、フロイドの學說をあらかじめ見越しており、實人生の觀察により本能的にそれを知つていたので彼らは主張する。ハムレットが、自分自身でも認めておられるように、一種の憂鬱性を示していることは眞實ではあるけれども、シェイクスピアはこの憂鬱性が、種々の怖るべき事件の起つた結果生じたものであることを、十分明らかにしている。精神分析的に構成することは、この悲劇の眞意を誤らせる。それはハムレットの母への關係から道德的な問題性や悲劇的な含蓄——シェイクスピアが盛り込もうとしている——をすべて奪つてしまふ。

優れたシェイクスピア學者の一人であるブラッドレーは、精神病理學的立場に立つ解説者達を、成程と思わず様に批判している。彼は云う。もし彼らが正しければ、この戯曲は「もしあるとしても、ほんの僅かな悲劇的興味をひき起すにすぎないであろう」と。しかしブラッドレーさえも、ハムレットの憂鬱的な言辭に中心を置く解釋から全く自由だとはいえない。彼は——ハムレットは生來憂鬱な性格なのではなく、むしろ快活で且つ陽氣でさえあつたといふことに、シェイクスピアは何らの疑いをも残してはいないけれども——、憂鬱といふこの病的な氣質が、ハムレットの躊躇逡巡と自己嫌惡の眞の理由であると信じているのである。「ぼくは最近すっかり陽氣でなくなつた」(II, iii, 306f)とハムレットは云う。彼が陽氣でなくなつたのは果して驚くべきことであろうか。彼の父が殺害され、殺害者たる野心家の叔父が彼の母と結婚し、その上彼自身が王位の繼承を阻まれている時、一體誰がその陽氣さを失なわずにいられようか。我々ほもしこのような出來事の後でもなお、ハムレットが依然として陽氣であるとするならば、そ

のようなハムレットを好むことは出来ないであろう。

ある學者は、ハムレットが著しく物思いにふけり、内省的な心をもつてゐることを強調する。たしかにこの性格は極めて顯著である。機會があるや否や、復讐をするよう衝動により、或は理性により驅り立てられる代りに、ハムレットは沈思黙想にふけつてゐる。彼はさながら心理學者の様に、自分自身の性格や動機を分析する。彼は狀況が行爲を要求する時、行動する代りに考へるといふ自己の性癖に、自ら茫然となるのである。このような性向を歎いて彼は云う。「決心の鮮かな色は、憂鬱という青白い色で塗りつぶされてしまい、高遠な大計畫も……實行の名が伴わなくなるのだ」。(III, I, 84/88) ハムレットはかく判断することにおいて正しいであろうか。彼は自身のこの不可解な、なすなきことの理由を認識してゐるのであるか。本當に彼は行爲的な人間であるには、餘りにも思索的な人間なのであるか。

確かにハムレットは一種の哲學者である。たとへ他に何はなくとも *To be or not to be* という抽象的な言葉が、この特質を立證するであろう。彼は丁度ルネッサンスの思想家の如く、しばしば人間の高貴さと慘めさについて、死と不死について、魂と肉體の間の謎の如き關係や、その他の諸問題について思索する。我々の習慣としては、政治的な決定、ないし外交上の處置に對し、責任をとらねばならぬ王子、軍人になり一國の指導者になるよう宮廷で教育される王子に、このような問題について思索することを期待しはしない。黙想にふけるのは、シェイクスピアが描くハムレットの個人的な性向なのである。この性向が彼の逡巡の原因なのであるか。そしてハムレットがこの性向の故に自分自身を責めるのは正當であろうか。

人はこの點を過大視してはならない。結局のところハムレットは、ある狀況の下では極めて能動的に働かうるのである。彼は母と話してゐる時、カーテンの背後に怪しい物音を聞いて叔父が潜んでゐると思ひ、心にもなくポロニアスを刺し殺す。こゝでは彼は、亡靈が要求したことを遂行するのに、極めて決然としてゐる。ハムレットはまた、

廷臣ローゼンクランツとギルデンスタンが、クロードディアスの命により彼自身を亡き者にせんとしたが故に、彼らを死に至らしめる。彼はポローニアスの息子で、オフィーリアの兄であるレアティーズに、自分の熱愛したかの少女の墓場に出會う時、彼に激しく逆らい、襲いかゝる。「おれは怒りつばくも亂暴でもないが、たかをく、つてかゝると、ちよつと危険な相手だ」(V, i: 2846)と、彼は叫ぶ。あとで彼は親友ホレーシオに、この亂暴な行爲に對し詫びている。「ホレーシオ、ぼくがレアティーズに對して、われを忘れた振舞をしたことは、はなはだ遺憾なことと思つてゐる」(V, ii: 75176)と。もつと前の所では、彼は自分を「誇り高く、復讐心に燃え、野心的である」(III, i: 12617)と稱している。

それ故に結論として、ハムレットの哲學的傾向は彼の遲疑逡巡に對する十分なる説明とはならぬと云わなければならぬ。ハムレットの性格中には、行動と沈思の間に一種靈妙なバランスがある。彼は思案を好みはするが、それにより麻痺されることはない。もしシェイクスピアが、ハムレットは他の何にもまして著しく瞑想的な心の持主であることを示唆せんと欲したならば、彼はハムレットを復讐心に燃えた危険な、精氣に満ちた男として描きはしなかつたであろう。それ故に我々は、何故にハムレットが勇敢で、單に瞑想的でないにかゝらず、復讐をするのを躊らつたか、そして何故に最終の第五幕に至るまで、彼が決意するのがおくれたのかの、より深い理由を求めねばならない。

ハムレットは、自らの運命が彼の上におしかぶせて來た、困難で危険な課題を果すには、餘りに柔弱であると考え一部の批評家は、ハムレットの態度を更にちがつたように解釋せんと試みて來た。外ならぬドイツ最大の詩人ゲーテ——彼はシェイクスピアを、殊にその「ハムレット」を非常に賞讃した——は次の様な解釋を下した。「主人公に不可缺の逞しい強さをもたぬ、眉目よく純情でやさしく、且つ極めて誠實な人物である彼は、荷負うことも投げ出すことも出來ぬ重荷により身を破滅させる。義務はすべて彼にとり神聖である。だがこの義務は重きにすぎぬ」(ウィルヘルム・マイスター、徒弟時代・第四部)他の箇所でもゲーテは更に細密に「シェイクスピアはある偉大な行爲が、到底

それをなす力のない魂に課せられた場合を實例をもつて示さんとした。この戯曲は終始一貫このような仕方で開催していると思う……」と云つてゐる。初めの方の叙述はハムレットよりもヴェルテルの方にあたつてゐる、ハムレットの性格についてのシェイクスピア自身の評價は、ハムレットが死ぬ時ホレイショウの口を通して云い現されてゐる。

即ち「氣高い心の主がもう事切れた」(V, ii. 369)と。又ブラッドレーは「ハムレットはあつばれな恐ろしい人物である」と語る時、ゲートルより以上にこの様な判断に同意してゐる。私はハムレットが、亡靈より負わされた重い義務を遂行する勇氣と強さに缺けてゐると思わない。ハムレットが感受性にとみ繊細な性質の持主である點、ゲートルは正しい。しかしハムレットの性格の中にはまた、彼の様々な行動が示してゐる如く、幾分粗暴であぶない、向う見ずなところがある。彼はクロードディアスの犯した父王殺害事件から生じて來た義務を果さねばならぬという、つきつけられた課題を受取することを拒みはしない。それどころか彼はそれを極めて眞劍に考へてゐる。これが彼の事件に對する態度であるからこそ、彼は復讐の様々な面や結果をすべて考慮するのである。もし彼が復讐なる行爲から後ずさりしていたならば、彼は自殺をするか、或は周囲の状況に身を任せたことであろう。そうはせずして彼は、これらの可能性を共に誇りをもつて、且つ勇敢に拒んだのである。彼は決して柔弱にすぎることはない。むしろ彼は後に我々が見る如く餘りに良心的であるが故に、すみやかに行動出來なかつたのである。

ハムレットが一見柔弱に見えるのは、次のような章句から生じたのかも知れない。「世の中は調子はずれだ。あゝ、なんとという悪因縁か！ おれがそれを直す役廻りに生れて來たなんて！」(I, v. 189. 190)しかしハムレットは、彼の置かれた苦境の困難さに、苦情をもらすだけの十分な理由をもつてゐないであらうか。彼の置かれた状況は、まことに望みなく陰鬱なものではなからうか。もし我々が彼の位置に身を置いて想像してみるならば、彼には最大の同情を覚え、且つ最後には彼自身の死をもたらしした、思慮深いと同時に斷乎とした彼の英雄的行爲に對し、最大の賞讃をなさずにはおれないであらう。このような見方を支持する者は、外ならぬノールエーの王子にしてデンマークの敵、フォ



ーティンブラスである。彼はハムレットの申いの儀式を行う準備をする時、次のように言う。

「ハムレットを戦歿軍人のように丁寧に、四人の部隊長が擔いで高壇に運んで行け。國王の位置にすえたなら、あつばれ、名君主となられた人であつたからな」(V, ii: 407/9)

シェイクスピアが主人公に對するこのような莊重な稱揚の言葉をもつて、その戯曲を終らせているのは、決して深い意圖なしではない。

### 三

私の見るところでは、ハムレットの躊躇の原因を彼の良心に求めているのが最もよい説であると思う。しかしながら彼の良心の内面は、これまでさまざまな解説者により説明されて來たよりも、もつと複雑で入りこんでいると思う。ハムレットが如何に良心的であるかは、父なる亡靈の出現とその言葉に對する彼の受け取り方から知ることが出来る。事件の發端から彼は何程か自己分裂の状態にある。即ち一方では彼は亡靈から聞いた言葉に深く動かされる。それによつて以前から懷いていた疑惑が確かめられ、下手人なる叔父の罪をはらさなければならぬと感じ、叔父を「殘忍な逆逆者、人でなしの好色漢」(II, ii: 610)と呼ぶ。しかし他方、亡靈が果して眞實を語つたか否かについて、彼はまだ絶對的な確信がもてない。亡靈は惡魔から遣わされたものかもしれないと考え、ハムレットは云う「惡魔は人の氣に入る姿をも装う力があるという。そうだ、惡魔はおれの氣の弱さと憂鬱に乗じて——とかくそういう氣質の者には格別の力強く働きかけるもの故——おれを手玉にとつて地獄へ陥れようとしているかも知れない」(II, ii: 628/32)と。彼は事實を確かめんがために、王の凶惡な所業に似たたくらみが演じられる芝居を宮廷でしよう取計らう。クローディアス王がこの芝居の演じられるのを見た時の態度によつて遂にあらゆる疑いを越えて、彼こそ父王殺害の罪を犯した者であるということが明かになる。この時以來、ハムレットの、王に對し、王妃に對し、全宮廷に對する態

度が一變する。彼は亡靈の要求したことをなそうと決心し、専らその決心を實行に移す機會をさがし求める。「お、たつた今からおれの考えは残忍になつてくれ！ でなければ、三文の値打もなくなつてしまへ！」(IV, ii. 65/6)

しかし最初から、何かもつと隠されたものが、ハムレットの心中に動きつゞけている。彼の心を煩わしているのは單に事實についての不確かさだけではない。何かもつとほかのものが彼の心の背後にひそんでおり、それが彼を妨げ、彼の行爲を手聞取らせている。批評家達はハムレットの中なる「より深き良心」について語つて來たが、彼らはそれで何を意味させているのかはつきりと語つていない。ブラッドレーはこの種の解釋に言及しているが、即座にそれを拒否している。彼は云う、もしシェイクスピアがハムレットの心中に、このような障害があると讀者に信じさせようと欲したならば、彼はそのことをもつとはつきりと示したであらうと。ブラッドレーは更に加えて云う。しかるにシェイクスピアはハムレットのこのような内面の葛藤につきたゞ一度だけ言い及んでいる。しかもそれがかく言い表されるのは、ハムレットが長らく企てつゝ常に延して來たクロードディアス王暗殺を、いよく／＼間近になさんとする最終幕の第二場の終りにおいて初めてなのである、と。その時ハムレットはホレイシヨウに向つて次の如く云つてゐる。

「だから君、僕の果す責任ではなからうか——父なる先王を殺し、母を汚し、横合からはいつて來て、僕の即位の望みを邪魔し、あまつさえこんな悪企みで僕自身の命を引つけようと針を投げた奴、そいつをこの腕で片付けるのは良心 *conscience* に何ら恥ずることなき行いではないか。かような人類の敵をしてさらに害毒を流さしめることは、墮地獄に値する大きな罪ではないか」(V, ii. 63/70)

こゝでハムレットは、それまで彼をさえぎつて來たが今や消え去つたかに見える、自らの良心のためらいについて、實にはつきりと語つている。どのような良心のためらいが、そこで含意されているのであるか。彼がこんなにおそく内面の葛藤を言葉に云い表しているからといって、決してこの告白の重みが減するものではない。おそらくこの時に至つて初めて、彼は自らの良心の中にこのような障害のあつたことに完全に氣付いたのであらう。とにかくハムレツ

トはこゝで「全く良心に恥じぬ」と感じたのである。既に「生きるか、死ぬるか」の獨白の中で、彼は「我々をすべて臆病にしてしまふ」(III, i, 83) トリアンの「良心」(Conscience) について語っている。ブラッドレーはこの章句を説明せんと努めているが、成功していないように私は思う。

ハムレットが、叔父の王を殺害するという良心的な不安に、最初から心を亂されていたことは否定出来ない。この様な良心的な不安が、彼の心の表面に現れていないということは認められようが、しかしこのことはかゝる良心の不安が、その性質上、叔父に怨みを晴らしたいとの衝動と同じ様には表に現れていず、又それと同じ様にはありふれたものではないという事を示しているにすぎない。亡霊の言いつけはより深い戒め、即ちハムレットが直接にあらわに云い現わしてはいないが、先きに引用した言葉の中にはつきりあらわれている、より深い良心の戒めによつてその力が消されている。彼のすべての躊躇や逡巡は、それをこのより深い良心の光の中において見る時、新しい様相を帯びてくる。その時また、上記の諸章句や、特に獨白の中にこのような良心について多くの暗示がなされていることに人は氣付くであろう。彼は常に父王と自分自身の名譽を回復すべき義務について語つてはいるけれども、同時にまたこの義務を果すのは、單に外的な事情のために困難であるばかりでなく、自身の内にかゝる血なまぐさい行爲に對し抵抗するものがあるが故に、困難であることをも、感じているのである。ある箇所では、彼は「天と地獄とによつて」(II, ii, 613) 復讐をするよう促がされていると語つてゐる。何故地獄によりかくするよう促されているのであろうか。

#### 四

スファスモア・カレッヂの、物故せる英文學教授ハロルド・ゴッダード氏は、數年前に刊行されたその極めて優れた著作 (The Meaning of Shakespeare, The University of Chicago Press, 1951) において、從來のすべての批評家がその上に立脚していた、ハムレットの義務や性格についての考え方を完全に轉倒させた。從來の批評家がすべて

次の二つのこと、即ち亡靈の要求は單に常識に叶つていただけでなく、たとえ神聖でなくとも争いえない義務を表現しているということ、並びにハムレット自身はその義務を遂行することを躊躇いはするが、その義務の正當さを少しも疑わないということ、を當然のことと認めているのに對し、ゴッダード氏はこの一般にうけ入れられている、本戯曲の全解釋の前提そのものを論駁する。即ち氏は、ハムレットは亡き父王の意志に従うべきではなかつたと主張する。父王の意志はゲートの云う如く、聖なるものではなく反對に、ハムレット自身が最初に怪しんだ如く、全く聖ならぬ、のろわしい惡魔的なものであると氏は論ずる。復讐はあらゆる状況の下において禁じられており、殺人は亡靈自身さえもが強調した如く、常に「最も邪惡な」(C. v. 27) ことである。ポローニウスがハムレットにより殺された後で、レアティーズを説いて「復讐には場所の制限はないはずだ」(IV, vii. 129) と云うのは、先王を殺害したクロードディアスである。天ではなく地獄が、血なまぐさい行爲に報いるに、他の血なまぐさい行爲をもつてするようハムレットに指圖するのである。ゴッダード氏によれば、ハムレットは復讐と忍従との間を行きつ戻りつ動搖しているが、それは彼が義務を果すか臆病に止まるかの選擇に面してはではなく、罪をえらぶか恩寵に従うかの選擇に面してはからであると言う。

ゴッダード氏の見解は、私にカーライルの次の言葉を思い起させる。「服従の正當でなき時に服従を求める者に禍あれ。服従の正當な時に服従を拒む者に禍あれ。人が他の者にむかつてなすあらゆる要求の核心には神の如き正當さか、さもなければ惡魔の如き不當さがある」これこそハムレットが直面していた運命的な二者擇一である。彼は亡靈によつてさし示された不當と、自身のより深き良心において感ずる正當との間に立つている。もし亡靈の要求が神聖なものであれば、それに従うことを拒む時、ハムレットに禍あれ。もしその要求が惡魔的なものであれば、それに従う時、ハムレットに禍あれ。ハムレットはこの容易ならぬ決定に確信がもてない。それで彼は逡巡する。ゴッダード氏によれば、二人のハムレットがいる。一人は純粹で正しく神のようなハムレットであり、他は殘忍で復讐心に燃え

た悪魔的なハムレットである。「劇中劇の場までは、ハムレットの内部の相對立する性格は、とにかく均衡を保つていた。しかし劇が宮廷で演ぜられると共に、血ばしつた激情が優位を占め、ポロニアス殺害においてその勝利はたしかめられた」とゴッダード氏は云う。ハムレットは自分のこの二重性格を自身よく知っており、墓場でレアティーズに加えた自らの暴行について語る時、彼は驚く程明確にそれを云い現わしている。

「レアティーズに無禮を働いたのはハムレットだったか。決してハムレットではなかつた。ハムレットがハムレットからもぎ取られて、もはやハムレットでない時に、レアティーズに無禮を働くならば、それはハムレットの仕業ではないよ。ハムレットはあくまでそれを否定する。では誰の仕業か。彼の狂氣の仕業だ。そうするとハムレットは無禮を働きかけられた側の一人なのだ。狂氣こそ氣の毒なハムレットの敵なのだ」(V, ii: 244/250)

如何なる形而上學的辯證論者も、これ以上巧みに道德的な惡と罪の内なるアンティノミーを言い現わしえた者は、これまでにないであろう。危険で高慢な、そして復讐心に燃えているハムレットは、眞のハムレットではない。彼は自らを自分自身から疎外する、あるデモニックな力に導かれているのである。それはハムレットをして道を失い惑わしめる彼の内心の敵なのである。眞實のハムレットは自らを制し、怨みを晴したいとの自己のより低い本性をなだめ、激情を抑える。サタンと神とが「哀れなハムレット」の胸の中で相互に戦つていゝ。かくてゴッダードの創意に富んだ深い解釋から導き出されるものは、マニ教的な「善惡二元の」哲學に近い。ゴッダードの辯ずる所によれば、最後にサタンは勝利を占める。實際、劇中劇においてクロードィアスが、自己のやましい心を省み、且つハムレットがその時より彼を暗殺する企てを遂行せんとする時に、サタンの勝利は既に大體において確かなものになつてゐる。ハムレットは、自分の中に巢くう如何なる臆病心も今や義務のゆえに、打負かされたと、自分に説いて聞かせる。彼は「この結末の仕上げは神の威光による。」(V, ii: 10)と、ひとりぎめしているが、事實は、善良なハムレットの神々しい純粹さを抑えて優位に立つたのは悪魔の仕業であつた。かくてハムレットは彼の最後の運命を用意し、それを

引き起すに至るのであると。この説は果して支持しうるであろうか。

## 五

疑いもなくゴッダードは、従來の解説者により全く無視されていた、シェイクスピア劇の極めて重要な一面に着目している。彼の説には論破し難い眞實性がある。クロード・ディアスの犯した罪に對し復讐せよとの亡靈の命令は、一種の至上命令であり、倫理的に絶對的なものであると假定するのは、まことに素朴な見方であつた。亡靈の命令がハムレットの心の前面を占めているのは事實ではあるが、この劇を観る者は、作者シェイクスピアが、観客に、この點においてハムレットと同じ考え方をしよう望んでいるのだ、との誤つた考えに、惑わされ陥つてはならない。まことにハムレットが自分自身を「復讐心に燃えている」と自己批判する言葉に、我々は警告を讀みとるべきである。復讐ということが、ハムレットの良心の上に義務として掩いかぶさつていゝ唯一の事柄ではないのである。彼が復讐を躊躇うのは、復讐そのものが本性上疑わしい行爲であるということから來る、より深い良心にもとづいてゐるに外ならない。ハムレットの最も内奥より發する聲が、彼を抑えて血を流させないのである。こゝまではゴッダードは正しいし、彼の説は今後の討究においても決して無視されてはならない。しかしながら果してゴッダードは、シェイクスピアの悲劇を十分正當に扱つたであろうか。

十分ではないと私は思う。彼以前のすべての解釋を逆轉せしめる彼の説は、反對の極へ餘りにも行きすぎている。ゴッダードは従來の説もまたある一面の眞實を指摘しているということ、即ちそれも全く誤つていたのではなかつたということ、を、みすごしている。確かにハムレットの魂の中には、内なる闘いが絶えず行われていた。しかしながら、共に相對的な正當さを有する二つの相背する道德的な力があればこそ、それは眞の闘いなのである。さもなければ闘いは悲劇的な壯大さはもたないであろう。ハムレットは自分の叔父を所罰するよう、眞に義務づけられていたれば

こそ、良心をひき裂く葛藤のわなにとらえられるのである。もし闘いが神とサタン、善と悪との対立により惹き起されたのであれば、彼の良心は内に分裂することはなかつたであろう。ハムレットの性格、全體にみなぎる劇的な緊張、悲劇的な最後の破壊は、かの葛藤が主人公ハムレットの良心に深く根ざしていると假定して初めて理解することが出来る。二つの相背反する義務、ないしは規範の體系が、彼の心の中に生きていたのである。これら二者の中の一つが、どのようにして遂には「あわれなハムレット」の中で勝を占めるかを、シェイクスピアは示さんと意圖しているのである。

我々はこの内心の葛藤を注意深く吟味しなければならない。なんとすれば、それはハムレットの心の下意識中に隠されており、そこで演じられているから。私はこの二つの相對立する規範を、宗教的又は聖書の規範と、世俗的又は各人に定められた職務上の規範と呼ぼうと思う。ハムレットの魂は、この兩者の双方にそれ／＼相應じて反應する。従來の古い解釋がこの世俗的規範を一方的に省みたのに對し、ゴッダードは宗教的規範を一方的に考慮する。それ故に兩者共、ハムレットが躊躇する眞實の理由と、劇全體を決定しているハムレット自身の内奥の性格とを見落している。世俗的な要求こそ、ハムレットが認める唯一の道徳的要求であると主張することは正確ではない。しかしまた宗教的要求こそハムレット自身によりそれと認められ受け入れられてはいないけれども、唯一の正當な要求であると斷言することも、同様に正確ではない。シェイクスピアのハムレットはこの二つの規範の兩者に、一方には自覺的に、他方には無自覺的に直面し、而してそのそのようなわけで、第一の規範（世俗的規範）に従うことを躊躇うというのが眞實なのである。その結果彼は、劇の終りに近くホレイシヨウに向つて「君、僕は心中に苦悶があつて、夜も眠れなかつた」(V, ii, 475)と云う時、彼自身がみとめるように、彼は自己の良心の深みにおいてひき裂かれていたのである。

もしシェイクスピアが、ゴッダードが示唆するように、宗教的要求を、唯一の拘束力あるもの、即ち唯一の眞に道

徳的な拘束、唯一の恩恵ある拘束として受けいれるよう観客や讀者に望んでいたとすれば、何ら悲劇的葛藤は生ぜず、又何の悲劇も起らなかつたであろう。そこに生じたものは、たゞ善と惡の間、神的な決意と惡魔的な決意の間の葛藤にすぎなかつたであろう。さてたしかに世俗的な命令は、嚴密な意味では聖なるものでも神的でもないが、それにもかゝらず世俗的の命令もまた、道徳的の命令である。もつともそれはこの世の秩序のものであり、従つてもし宗教的秩序が絶對的な最高の秩序と認められるならば、第二に位するところの秩序のものであるけれども。ハムレットが、最後にはこの第二次的な秩序に従つたことは間違いない。彼は名譽や理性、ないしは彼の職責の求めるところのものに従つたのであつて、神の要求するところに従つたのではない。このように決心したことは悲劇的である。我々はシェイクスピアのハムレットのもつ、宗教的の良心について最早知らずにいるのではないだけに、それは餘計に悲劇的である。

前にふれたように、ハムレットは宗教的な考慮から自殺をすることを思い止まらざるをえなかつた。「それとも自殺を罪とする掟などを、神がきめなければよかつたのに」(I, ii, 1312)と彼は叫ぶ。又「生きるか、死ぬるか」のせりふの中で、彼は再び死についての宗教的思想について語る。「たゞ死、それはこの世から旅立つ者の一人として、歸つて來たためしのない見知らぬ國であるが、その死の後に來るある物が恐ろしくて、われ／＼の決心が鈍るからだ。未知の不幸へ飛び込むよりは、慣れた不幸を堪えた方がよいと考えるからだ」(II, i, 7882)なるほど彼は「かように、反省はわれわれすべてを臆病にしてしまう」と言いたしてはいるが、自殺を拒むことが彼の目に臆病にみえると、本氣で思っているはずがない。むしろそれに反して、最大の勇氣は、どんどん生きてゆき、危険な狀況をもつとせず不幸と闘つてゆくために、必要であるということ、彼は感じている。しかしながらハムレットの宗教的良心は、彼が母の過失をたゞす有名な場面でも鮮かに光り輝く。彼は母の魂が救われるようにと、母をして懸命に悔い改めさせようとする。「早く天に向つてぎんげをなさい。過去を悔い、將來を慎みなさい……」(III, iv, 149/150)と、ハ



レットは母が自分の諫言により、打ちくだかれたのを見た時、彼は「僕はあなたのためを思うて酷いことを申上げねばならないのです」(III, iv, 178)と叫ぶ。彼はこの場で語るように、自分がさながら「天の代行者」であるかのよう

に感じている。

ハムレットの宗教的な氣質を示すもう一つの例は、彼が自分自身を責めさいなむ際の、きびしい自己批判である。「ぼく自身はかなり堅気なつもりだが、それでも母がぼくなぞ生まなければよかつたのにと思うような、いろんな罪をわれとわが身に責めることもあるよ」(III, i, 123/6)と、彼はオフィリアに告白し、更に「われわれは誰もかれも大の悪黨だ。われわれなぞを信じちやいけな」(ibid. 131/2)と言う。これは一種のキリスト教的な自己折檻である。

「生きるか、死ぬるか」というかの大獨白は、彼の内奥の葛藤と不安を表わしている。この獨白がそのまわりをめぐっている「問題」は、必ずしも生きるべきか死ぬべきかということではなくして、むしろ氣高くあるべきか否かということである。ハムレットその人がそう云っている。

「暴虐な運命の矢玉を心にじつと堪えるのと、海と寄せくるもろもろの困難に劍をとつて立ち向い、抵抗してこれを終煩させるのと、どちらが立派な態度か」(III, i, 57/60)

これが問題なのである。實際いづれがより立派なことであるのか。表面上では第二の道が自殺に比してはるかに立派な道であるかのように見える。しかし不運に耐え、そうすることによつて純粹さを保ち、聖書が『復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する』と「主が」云われ』(ヘブル人への手紙一〇・三〇)たと戒めるように、復讐を神の手にまかせる方が、おそらくより立派なのではあるまいか。これは最も深い問題である。ハムレットの心にこの問題がうかんだかに見える。しかし次にはそれは再び彼の踏み迷う心から消え去るのである。

ハムレットの心中における葛藤は、自殺するか、行動を起すかの間の葛藤ではなく、神に身をゆだねるか、叔父を殺害するかとの間の葛藤である。叔父を殺す事は彼の現世的な義務であり、神に身をゆだねることは宗教的な絶對事

ある。ハムレットはこれら二つの相反する可能性の間を、それらの本性を十分に自覺することなしに、動搖している。ある時は彼は叔父を殺すことは、自分の復讐心を満足させることであると考へ、次には又それは自分の最高の義務であり、理性そのものの要求である、と考へる。この角度から見るならば、自己の激情にふけるべきか、道徳的理性に従うべきかが、彼の内心の葛藤であるかのようにみえる。結局兩者共に同じ決意を示しているようにみえる。復讐は理性によつてはむろん、血によつても要求されているのである。ハムレットが兩者のこの一致に氣付くに至つた時、彼は決心する。しかし眞の葛藤はそれによつてたゞ回避されたにすぎない。これがハムレットの内面的發展の上における悲劇的な難關なのである。

内心の葛藤は世俗的な義務の勝利にと至つた。世俗的義務の勝利であつて、單なる復讐の激情の勝利ではない。ゴッダードが論ずるように、天使のようなハムレットを打負したのは、單に「復讐心に燃えた」ハムレットではないのである。この世の義務に従うことにおいてハムレットは、惡魔に従いそれによつて自分自身を破滅せしめたのではない。結局のところハムレットを葬り去つたのは、神と惡魔との間の葛藤ではなく、神とこの世との間の葛藤なのである。別の言葉で云えばシェイクスピアが描く葛藤は、中世のカソリック的な眼でみられているのではなく、近代的なプロテスタントの眼でみられているものである。このことは我々の議論をすゝめてゆくにつれて、もつと明白になつてくるであらう。

シェイクスピアは、神と惡魔のではなく、神とこの世のコントラストにより引き裂れた人間を描いているのである。ハムレットは事實解決不可能なこの葛藤「神とこの世の葛藤」により破滅せしめられたのである。これがこの悲劇全體の核心である。たとへ彼が非常に宗教的であり、良心的であつても、脱出する道はない。この世には、それ自身の秩序、それ自身の權利、それ自身の倫理、それ自身の義務がある。この點をゴッダードは見落している。この世は單に惡魔的なものではなく、この世もまた神によりつくられたものであり、この世の法律や禮法、制令は單に、それら

を惡魔の手になるものと見せかけて、無視することは出来ないということを、シェイクスピアは示唆しているように思われる。

ハムレットは叔父に對するこの一件を放擲することは、おそらく出来なかつたであらう。己れが自分自身の眼に臆病者と映ることなしには斷念することは出来なかつたであらう。結局するところ、問題となつていたのは、單に彼の個人的な名譽や、個人的な權利だけではなかつた。回復されねばならなかつた正義そのものが問題であり、根絶されねばならなかつた「がん」が問題であり、邪惡な王より救われなければならなかつた國家が問題であつた。これらのことすべてが亡靈の命令の中に含まれていた。復讐はまた所罰でもあつた。この場合殺害者を弾劾する裁判所も、裁判官も、法廷もなかつた。ハムレット唯一人で裁判官、原告、辯護人たるべく神によつて任命されていたのであつた。彼は犯人に刑を宣告しなければならなかつた。彼は法を執行しなければならなかつた。彼は深くこの義務を感じていた。このような、世俗的な義務に對して、汝殺すべからずという宗教的な命令が對立していた。勿論葛藤は、彼が法的な意味では裁判官でも辯護人でも治安判事でもなく、何ら法的な助けをかりることなく、犯された暴虐行爲に直面しなければならなかつたが故に、現に見る如き激しく、解決不能のものとなつたのである。

中世においては、この世から不當な扱いをうけ、内心深く神に歸依した王子は、僧院に入ることが出来た。僧として彼は、問題の解決を自らを僞ることなく避けることが出来たであらう。彼は純粹な良心をもつて生活することが出来たであらう。彼は神のみに自らを手渡すことが出来たであらう。ハムレットがオフィーリアに尼寺へ行くようすゝめる時、彼は自分自身にとつても唯一の殘された可能な解決策として、かゝる逃避を考えたのかもしれない。しかし中世の王子ではなかつたからして、彼は僧になることは出来なかつた。かゝる逃避の道は自殺するよりもまさつていゝるとは云えないであらう。まことにそれは一種の自殺であつたであらう。ハムレットは、シェイクスピアが描いていゝるように、王位の法的な繼承者であつた王子の義務、貴族として、武人として、又子としての義務を、何らか名譽を

傷つけぬ仕方であつた。彼はこれらすべての職責上の義務を、遂行しなければならなかつた。かくて宗教的な反省は、不可避的に世俗的な反省により打碎かれざるをえなかつた。ゴッダードはかの葛藤の宗教的側面のみをみ、世俗的な側面——それは悪魔的なものでなく、倫理そのものであり、その限りにおいて、ハムレットも云う如く「天によつて」促されている——を無視している。この悲劇的な終末が續かなければならなかつたのである。

歴史的な見地よりみて、ハムレットは、ローマ教會が道德生活の習慣や規範を支配していた時代に達成された綜合——神とこの世、精神界と世俗界との中世カソリック的な綜合の、分裂崩壊に苦しんでいたのだとも云えるかもしれない。彼の次の言葉、即ち「世の中は調子はずれだ。あゝ、なんとこの悪因縁か！ おれがそれを直す役廻りに生れて來たなんて！」(I. v. 189/190)は、多分にこの様な意味を含んでいと云つてもよからう。もつとも云うまでもなく、この言葉の誰にも明らかでない意味は、ハムレットとデンマークの不幸な運命にかゝつていゝものではあるけれども。シェイクスピアはあきらかに、中世的世界の崩壊により引き起された問題を深く感じていた。シェイクスピアは彼自身をハムレットなる人物の中に描いているとは、これまでしばしば指摘されて來たことである。もしそうであれば、ハムレットの演劇や俳優に對する愛好は勿論のこと、彼の哲學癖も、この一體化〔シェイクスピアが自分をハムレットなる人物の中に描いたということ〕に遡り連ることが出来るかもしれない。とにかくハムレットはルネッサンス及び宗教改革なる近代の二運動により影響された人間である。ルネッサンスと宗教改革運動との對比は、彼の自己を分裂せしめた。彼にはこの兩者を統一することが出来ない。この歴史的な狀況は、彼の心を動かしている二つの相對立する哲學の中に反映している。その一つはかの墓地の場で語られる言葉に現われているやうな、この世的な、自然主義的な、唯物主義的でさえある哲學であり、今一つは數々の獨白が例示している如き宗教的、精神的、キリスト教的な哲學である。この哲學上の二元性は、彼の人格上の動機における二元性と對應しており、この動機における二元性

こそ彼を内面的に苦しい破目に陥れ、且つその結果彼をして躊躇逡巡せしめたものなのである。次の二つの事柄の暗示するところは、ハムレット、つまりシェイクスピアが、プロテスタンティズムにより影響されていたということを證明しているように思える。即ち「第一には」「ねえ、ホレイショウ、この天地間には哲學では夢にも考えられないことが澤山あるんだよ」(I, v, 166/7)という有名な言葉は、明らかに反スコラ哲學的な響きをもっている。「第二には」「ハムレットがウィッテンベルグの大學で學んだという事實もまた、このような影響のあつたことを暗示している。なんとなればウィッテンベルグはルッターが彼の歴史的な「九十五箇條文」をその大寺院の扉にはりつけた市であり、且つウィッテンベルグの大學は最初に反スコラの關心を示し宗教改革の理念により鼓吹された大學であつたから。(了)

(譯者 奈良學藝大學(宗敎學)助敎授)

附記 本篇は Richard Kroner 敎授が一九五七年八月、アメリカのミシガン大學でされた講演の原文を、特に「哲學研究」に寄稿されたものの翻譯である。戦前 Von Kant bis Hegel や Kantus Weltanschauung 等の著書で我國の哲學徒の間にも親しまれていた Kroner 敎授は、一九三五年ナチスに迫られてドイツを去り、イギリス、カナダを経てアメリカに移住、爾來ユニオン神學校、テンブル大學等で宗教哲學を講じてをられた。譯者も渡米留學中その講筵に列なり親しくその教えをうけた。戦後の主な著書に The Religious Function of Imagination, The Primacy of Faith (Gifford Lectures), Culture and Faith, Speculation in Pre-Christian Philosophy (三部作になる豫定の Speculation and Revelation in The History of Philosophy の第一部)等があることは知る人も少くないであろう。敎授はナチスの横暴とドイツの破局に直面し、ヒューマニズムの脆うさと、ドイツ觀念論の限界を自覺され宗教の道へと歩み入られた。「今日、私は哲學の限界は信仰と神學により定められ且つ明らかにせられると信ずるが故にカント、ヘーゲルの兩者から離れ、且つあらゆる形態の哲學的觀念論から離れる」(Culture and Faith, Preface)と告白され、哲學と神學、理性と信仰とを如何に調停するかのヨーロッパ傳來の問題を、その細密な歴史的思考を背景としつつ、今日の時代的境位に立つて解決せんと努力してをられる。ハムレットを扱われた本篇もその根柢においてはかかる問題意識に支えられているのではないかと想像せられる。なおハムレットよりの引用は Globe Edition により、引用文の翻譯は岩波文庫本、市河・松浦譯に大體よつた。又本譯稿作成にあつては中西信太郎敎授並びに英文學大學院博士課程在學の尾崎寄春氏の御敎示にあずかつた。記して謝意を表したい。

何故ハムレットは復讐をためらうのか

---

---

## THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

---

---

*The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.*

### Why Does Hamlet Procrastinate ?

by Richard Kroner

What we must keep in mind in discussing the above question is that the real question does not concern a historical figure with the name of Hamlet, but rather the intentions (if any) of his creator, Shakespeare. The true problem, therefore, is put like this: Why does Shakespeare make the hero of his tragedy procrastinate?

After arguing that neither the difficulty of Hamlet's outer circumstances nor his melancholy temper or philosophic bent gives in itself a sufficient explanation to his procrastination, the author of the present paper proposes that the best theory derives Hamlet's hesitation from his conscience.

Professor Harold Goddard, in his recent book, interprets that Hamlet oscillates between revenge and resignation, because he faces the choice not between duty and cowardice, but between devilish revenge and divine toleration: namely between sin and grace. Thus Goddard reflects one-sidedly on the religious norms, while the older conscience theory reflected one-sidedly upon the secular or vocational norms.

The present writer believes, however, that Shakespeare's Hamlet struggles with both norms, the one kind consciously and the other subconsciously, but in such a way that he hesitates to obey the first (i. e., the secular norms). The conflict in Hamlet's soul is not the conflict between suicide and action, but between surrender to God and revenge on his uncle. For Hamlet to revenge his father on his uncle is his worldly duty; to leave it to the wrath

of God is a religious absolute, but each has relative validity. Hence the real and most tormenting trouble to Hamlet. It is therefore in the last analysis not a conflict between God and the Devil, as Goddard puts it, but the conflict between God and the world, which buries Hamlet. In other words, the conflict which Shakespeare depicts here is not seen with the eyes of a medieval Catholic, but rather with the eyes of a modern Protestant.

## **Eine Betrachtung über den Erkenntnisbegriff.**

— Ein Blick in die Lasksche Erkenntnistheorie —

von Noriyori Shimasaki.

Erkennen ist Verhalten zum theoretischen Sinn; aber erkannt wird dabei nicht der theoretische Sinn, sondern lediglich dessen Material. Unter Erkennen verstehen wir eine spezifisch theoretische „Inte-lität“, ein Gerichtetsein auf ein von kategorialer Form umfasstes Etwas. Man darf also gar wohl vom Objekt des Erkennens sprechen; nur muss man sich darüber klar sein, dass dabei nicht das Objekt, sondern nur das Objektmaterial das ist, was erkannt wird.

Sich erkennend einem Etwas zuwenden heisst: auf die es umschliessende, es umgeltende Kategorie gerichtet sein. Etwas erkennen also heisst immer: kategoriale Form hinsichtlich oder betreffs seiner vor sich haben, Wahrheit und Klarheit darüber erfassen, der objektiven Bewandnis, die es damit hat, innerwerden, also immer etwas darüber oder darum erleben. Was sprachlich so treffend andeutet ist in solchen Wendungen wie: *um* etwas wissen, *über* etwas reflektieren, sich klar werden.

Denkt man daran, dass der für den Begriff des Erkennens bedeutungsverleihende theoretische Gehalt die Rolle der Form spielt, so ist mit Erkennen die Struktur theoretischen Sinnes, die Umschlossenheit eines Erkenntnismaterials durch kategoriale Erkenntnisform unlöslich verknüpft. Es ist der Hingeltungscharakter der Form, das auch der Redewendung „Wahrheit,-über“ zugrundeliegende Urverhältnis zwischen Form und Material, das sich hier in den Bezeichnungen für die erkennende Subjektivität widerspiegelt.